TEACHING & LEARNING Catalog vol.3

発行：山口大学
大学教育機構大学教育センター（YU-AP推進室）
〒753-8511 山口県山口市吉田1677-1
TEL.083-933-5261

2019年3月 発行

大学教育再生加速プログラム

YAMAGUCHI UNIVERSITY 山口大学

目　次

巻頭言 …… 02

この冊子の構成とインタビュー対象者 …… 03

アクティブ・ラーニングと「深い学び」 …… 03

TEACHING Catalog Part

教育学部 教授
霜川 正幸 先生
「キャリア教育」 …… 04

非常勤講師
GLASSIC BRIAN JEFFREY 先生
「英語会話Ⅱb」 …… 06

大学教育機構 准教授
林 透 先生
「文化の継承と創造1・2」 …… 08

共同獣医学部 教授
佐藤 晃一 先生
「生物学実験」 …… 10

大学教育機構 教授
中溝 朋子 先生
「日本語ⅣA（文法）」 …… 12

LEARNING Catalog Part

学習者の視点から大学の学びを考える
第1回 YU-AP学生スタッフ座談会 …… 14
第2回 YU-AP学生スタッフ座談会 …… 15

巻　頭　言

山口大学 大学教育機構
大学教育センター長
菊政 勲

山口大学は2015年に創基200周年を迎え、新学部の設置や全学的な組織再編を鋭意進めています。なかでも文部科学省大学教育再生加速プログラムの採択（2014年度）を受けて、積極的に大学教育改革に取り組んでいます。山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）では、テーマⅠ「アクティブ・ラーニング」、テーマⅡ「学修成果の可視化」の取り組みを通して、①多様な学生すべてに対する能力育成を最大限支援する、②本学の教育システムを学生および社会に質保証できる、③本事業成果を積極的に情報発信し、我が国の高等教育全体の発展に貢献すること、を目指しています。

特に、テーマⅠ「アクティブ・ラーニング」に関わる取り組みとして、共通教育においてアクティブ・ラーニングの授業実践に顕著な成果をあげられた教員を表彰する「AL（アクティブ・ラーニング）ベストティーチャー表彰制度」が2016年度に制定されました。3年度目となる今年度は、5科目・14名を選定し、2019年1月8日（火）に表彰式を行いました。受彰者は2017年度の授業実践において、どの程度アクティブ・ラーニング的な活動を取り入れていたか、学生の授業評価アンケートにおける授業満足度・理解度・達成度、授業外学修時間、成績評価分布などの指標をもとに選定されています。

さて、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）では、表彰にとどまらず、この貴重なALベストティーチャーの授業実践をアクティブ・ラーニングのグッドプラクティスとして蓄積していくことを進めています。また、教員の授業（Teaching）だけでなく、特色ある学生の学修（Learning）の蓄積も進めています。

それらを教員が手に取りやすい冊子にまとめて配布することで、教員のアクティブ・ラーニングの実践に向けたヒントにしていただくとともに、学生の主体的な学びについて改めて議論するきっかけになることを目指しています。

そのための冊子が、この「Teaching & Learning Catalog」です。是非ご一読いただき、今後の授業実践の参考にしていただければ幸いです。合わせて、本学における教育の在り方の議論として、アクティブ・ラーニングの手法論にとどまることなく、学生の「学びの好循環」を実現するための一助になれば望外の喜びです。

この冊子の構成とインタビュー対象者

この冊子は、特色あるアクティブ・ラーニング授業の実践を行った教員を対象としてインタビューをまとめた「Teaching Catalog Part」と、特色ある学びをしている学生を対象としたインタビューをまとめた「Learning Catalog Part」から構成されています。

「Teaching Catalog Part」は、YU-AP事業に関わる教員がインタビュアーとして、ALベストティーチャーを対象に行ったインタビューをまとめたものです。その際、他の教員の授業実践の参考となるよう、**当該実践において特定のアクティブ・ラーニング的活動がどのような目的で取り入れられたのか、実践にあたっての留意点は何か、学生の深い学びをどのように促していたのか**などの観点から、実践の詳細を語っていただきました。

「Learning Catalog Part」は、YU-AP事業の学生スタッフがインタビュアーとして、アクティブ・ラーナーである学生が、これまでどのような学びのヒストリーを経てきたのかインタビューし、学生スタッフ自身がまとめたものです。

以上のように、本冊子は、YU-AP事業に関わる教員と学生の共同作業によって作り上げられたものです。ご一読のほどよろしくお願いいたします。

2018年度 ALベストティーチャー表彰の様子

2018年度 ALベストティーチャー

区分	授業科目名	所属・職名	氏名
教養コア系列	キャリア教育	教育学部・教授	霜川 正幸
英語系列	英語会話Ⅱb	非常勤講師	GLASSIC BRIAN JEFFREY
一般教養系列	文化の継承と創造1・2	大学教育機構・准教授	林 透
		非常勤講師	山浦 晴男
		創成科学研究課・准教授	鈴木 春菜
専門基礎系列（理系基礎分野）	生物学実験	共同獣医学部・教授	佐藤 晃一
		共同獣医学部・教授	木村 透
		共同獣医学部・准教授	大濵 剛
		共同獣医学部・准教授	柳田 哲夫
		共同獣医学部・准教授	角川 博哉
		共同獣医学部・助教	日暮 泰男
		共同獣医学部・助教	三宅 在子
		共同獣医学部・助教	渡邉 健太
専門基礎系列（日本語分野ほか）	日本語ⅣA（文法）	大学教育機構・教授	中溝 朋子

Learning Catalog インタビュアー

	所属・学年	氏名
第1回 YU-AP学生スタッフ座談会	経済学部 2年	杉本 寛晟 さん
第2回 YU-AP学生スタッフ座談会	理学部 2年	大亀 洋輔 さん

アクティブ・ラーニングと「深い学び」

昨今、アクティブ・ラーニングの必要性が叫ばれていますが、その型を強調するあまり本来アクティブ・ラーニングで目指そうとしていたことが蔑ろになる危険性を指摘する声も増えてきました。

アクティブ・ラーニングは、習得・活用・探究という学習プロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた**深い学び**によって、必要な資質・能力を総合的に育むという目標を達成するための方法として位置づけられています。しかし、例えばディスカッションをしていればアクティブ・ラーニング、プレゼンテーションをしていればアクティブ・ラーニングというように、学生が深い学びをしているかどうかには関係なく、その型のみでアクティブ・ラーニングとみなされることがしばしばあります。

行動面（外的活動）がアクティブだとしても、頭の中（内的活動）がアクティブでなければ、そのような目標は達成されないでしょう。そこで松下（2015）は、行動面も頭の中もアクティブである、つまり**「深い学び」を促すアクティブ・ラーニングとして、ディープ・アクティブラーニングの必要性を指摘**しています。

この冊子では、松下（2015）を参考に、ALベストティーチャーの実践が学生のどのような「深い学び」を促すようなものだったのかを、「深い学習」「深い理解」「深い関与」といった軸によって捉えようと試みました。

参考文献

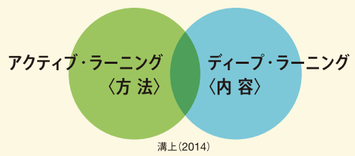
松下佳代・京都大学高等教育研究開発推進センター編（2015）
『ディープ・アクティブラーニング ―大学授業を深化させるために―』 勁草書房

松下佳代（2016）
「アクティブ・ラーニングを深化させる教育カウンセリング ―授業における関係づくりへの貢献を問う―」
日本教育カウンセリング学会 第10回公開講演&シンポジウム発表資料（2016.5.22）

溝上慎一（2014）
『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』 東信堂

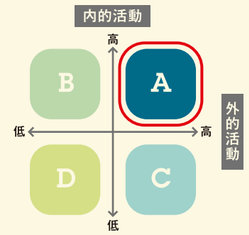
【ディープ・アクティブラーニングの考え方】
松下（2016）より引用

アクティブであると同時にディープでもあること



溝上（2014）

外的活動だけでなく、内的活動でもアクティブであること



01

インタビュイー

霜川 正幸 先生

Masayuki SHIMOKAWA

教育学部 教授

キャリア教育［教職キャリア形成Ⅱ］

教育学部がチームで取り組み、総勢14名の先生が関わるキャリア教育の授業が2017年度の授業の中で高い評価を得ました。1年生全員が山口県内の学校（幼小中高特）へ実習に行く教職キャリア形成Ⅰと連動して、学部の4年間の基礎となり、教員としての将来にまで結びつく重要な科目です。教育学部の学生のアクティブラーニングの姿勢作りも担う授業の工夫について霜川先生に教えていただきました。

シラバスに基づく授業内容 「キャリア教育［教職キャリア形成Ⅱ］」

【概要（共通教育の場合は平易な授業案内）】

この授業は、「教職キャリア形成Ⅰ」での教職体験をもとに、外部講師や実務家教員等による「講義演習」や各自が行った「教職体験」等の開示による「グループ協議」等をとおして、これからの教職キャリアの形成や大学での教職に関する学びの充実深化をめざすものです。教職科目としての重要性を理解し、真剣に取り組んでください。

【一般目標】

社会の急速な進展の中で人材育成像も変化し、児童生徒の「社会を生き抜く力」の養成が求められると同時に、学校や教員に求められる資質能力も高度化、多様化、複雑化している。本授業では、これまでの教職体験や学びを元に、今後の学校教員に求められる資質能力について解明し、「学び続ける教員」としての実践的力量や態度を身につける。

【授業の到達目標】

［知識・理解の観点］現在の学校が有する教育課題や今後の教員に求められる資質能力等について理解し、具体的に説明することができる。
［思考・判断の観点］これからの時代が求める学校像、教師像等について幅広い視点から捉え、今後の在り方について構想することができる。
［関心・意欲の観点］学校が有する教育課題や目指す教師像について関心をもち、将来像についてイメージすることができる。
［態度の観点］教職の学びに真剣に取り組み、自らのなすべきことについて前向きに取り組むことができる。
［技能・表現の観点］現在の学校が有する教育課題や今後の教員に求められる資質能力等を的確に捉え、分かりやすく表現することができる。

【授業計画】

〈第1週〉
オリエンテーション、学習班編成

〈第2～4週〉
班ごとに実習の振り返り、発表準備

〈第5～6週〉
実習振り返りのプレゼンテーション

〈第7～8週〉
全体講義演習、総括テスト

※この授業はクオーター制です

授業の流れ

教職キャリア形成Ⅱの授業は、全体での講義と班別の実習振り返りが組み合わされて出来ています。教職体験をもとに、現在の教育課題と今後求められる教員としての資質能力について、リフレクションの枠組みを全体で確認した後は、180名近い学生がコース・選修の垣根を越えた班に分けられて、それぞれの体験の振り返りと発表準備を行います。班ごとの活動は教室も分かれるため、各部屋に先生が配置されていますが、あくまで振り返りの主体は学生たちです。先生方は、活動と全体発表を踏まえて今後の学びの構想や、教職キャリアのデザインについて演習形の講義を最後に行います。

ALポイント 7.8

	項目	内容	A※	B	C	D
第3週	学校現場における教職体験を振り返る②	学校体験をとおして感じた教員として求められる資質能力についての意見発表	【中】	【多】	【中】	【中】
第4週	学校現場における教職体験を振り返る③	学校体験をとおして感じた現在の教育課題と今後求められる教員としての資質能力に関する各班代表によるプレゼンテーション	【中】	【多】	【中】	【中】
第5週	外部講師招聘による講義	講義演習「これから教員をめざす人たちへの期待」	【中】	【少】	【少】	【中】

※ A：グループワーク、B：ディスカッション・ディベート、C：フィールドワーク（実験・実習、演習を含む）、D：プレゼンテーション】
※【多】：授業時間の50%超、【中】：授業時間の15%～50%、【多】：授業時間の15%未満

基礎セミナーでのグループ協議

基本グループは10人で、進行も学生が中心

授業の準備

受賞授業はキャリア形成Ⅰと密接な関わりを持っています。県内の学校へ実習に行くキャリア形成Ⅰで、既に振り返りのために教育学部の学生に求められる「教える側の視点」についての集中講義と、実習中に見るべきポイントについて確認しているからこそ、班別の振り返りディスカッションがスムーズに進むことが分かりました。

教職キャリア形成の授業は後期開講ですが、14名の先生方によるチーム体制や、180人の県内学校の実習先のこともあり、5月には拡大教授会で既に情報共有が始まっています。授業のねらいや運営方法、各回ごとに指摘する点を14名で共有するために、メールでの連絡も密に取っておられます。このチームには教育学部の新規採用教員も入ることが多く、現場での学びを振り返るこの授業が新しい教員に対するFDとしての役目も果たしているそうです。

心がけていること

アクティブ・ラーニングが目指すところは、「学生一人一人の学習プロセス全体を見通し、目指す姿や変容のイメージに近づくための不断の授業改善」と考えていらっしゃる霜川先生。今回の受賞も、自分自身の次なる授業改善への「激励」と捉えていらっしゃるそうです。

また、キャリア教育の授業のため、小グループでの議論の経験を、将来の学年部会・教科部会などの会議で自分から意見を出すための練習にしてほしいと考えていらっしゃいます。個人発表をグループ内で行って慣れてから、大規模クラスの全体発表まで行う流れの先には、教員として働く学生達の姿があるのです。

授業の工夫と学生の反応

先生の卵である教育学部の学生たちは、既に教員としての資質を感じさせる子が多いそうですが、中にはアクティブな学びに慣れていない学生もいます。講義の回も含めて毎回ディスカッションを行わせながら、周りの子が上手に発言を引き出してあげられるよう工夫しています。また、安心して話せるように、なめらかに発言できなくても好きに喋れよ、という声かけが空気作りに役立っています。

潜在能力が高く、真面目で熱心な山大生たちの学びを充実させるために、「学生の学びの可能性を信じる」ことが重要だと仰る霜川先生。自分たちで考えさせた後、伸びた部分を正しく認め、表現として伝えることで、学生の学ぶ力を促進しています。

評価の方法

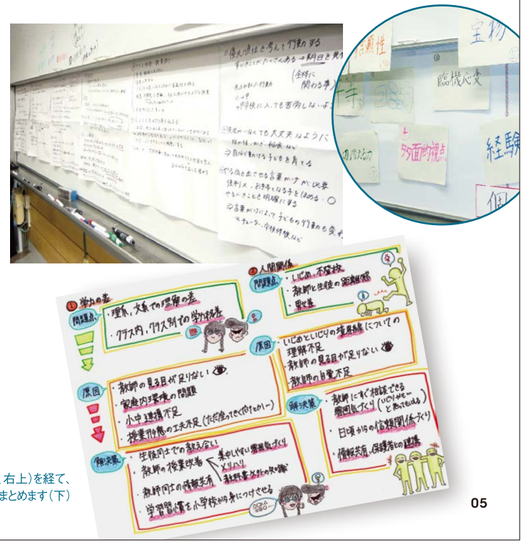
毎回の授業で「リフレクションシート」「授業、少人数学習、プレゼン活動等への参画姿勢」が評価されます。リフレクションシートは毎回項目が異なり、活動内容と活動の進め方の両方について振り返ることのできるもので、次の回には先生からのフィードバックも行われます。

また、学期末には、実習と振り返りで学んだことに関する論述式の試験を行っています。

今後の展開

この授業の鍵となる1年生の間に70校以上の小中高などへの学校・教職体験は、教育学部学務係の職員も含めたチームでの支援体制が不可欠です。事前指導だけでなく、学生の振り分け、学校訪問と現地指導を適切に行い、大学に戻ってからは10人ずつ班に分かれて、複数の教室で振り返りを議論するという濃い授業を継続するためには、学校や教育委員会との連携・協働の拡充や、授業参画の教職員拡大を含めた持続可能な運営組織づくりが必要だそうです。

アクティブ・ラーニングのための教室環境の整備も要望しつつ、まずは固定机の場所でも教員のホワイトボードセットを持ち寄りながら、指導方法の工夫改善で課題を乗り越えていくという姿勢からも、学生が目指すべき「学び続ける教員」の姿が伝わってきました。



沢山の意見を出すグループディスカッション（上、右上）を経て、現在の学校の課題と解決策をまとめます（下）

インタビュイー

ブライアン 先生

Glassic Brian Jeffrey

非常勤講師

英語会話IIb

ブライアン先生は、英語会話の授業でベストティーチャー賞を受賞されました。
特別アクティブラーニングを意識していたのではなく、英会話に自信が持てるようになるための様々なアクティビティを、学生の気持ちになって準備・計画してきたというブライアン先生に、授業についてのお話を聞いてきました。

シラバスに基づく授業内容 「英語会話IIb」

【概要（共通教育の場合は平易な授業案内）**】**
英語をコミュニケーションの道具として使う能力を身につけます。この授業は知識より英語で実際に話し、聞いて理解する能力（スピーキング&リスニング）の養成を重視します。また、「英語会話I」に比べ、より正確で流ちょうな言語使用を重視します。

【一般目標】
- 「英語会話I」の目標に加え、以下のことができる。
- 個人的に関心のある具体的なトピックについて、会話を数分間続けることができる。
- 関係詞を用いて、多様な質問をしたり、知らない語をパラフレーズすることができる。
- 鍵となる重要な情報（When、Where、Who、What、Why、Howなど）に関し、比較的スムーズに英語を使って情報交換することができる。
- 相手の発言に対して、質問したり、コメントを述べたり、相づちなどの反応を行うことができる。

【授業の到達目標】
［技能・表現の観点］個人的に興味や関心のある話題について、様々な質問、あいづち、コメント、パラフレーズなどを用いて比較的正確で流ちょうな英語で会話や情報交換ができる。

【授業計画】
〈第1週〉
コース、オンライン学習、タイムドスピーキングの説明
〈第2週〉
PDCAのグループワーク
〈第3〜14週〉
教科書ワークを3週で1ユニット
〈第15週〉
英文法復習

授業の流れ

第3週から英会話の教科書に従って授業が進みます。ですが、ブライアン先生の授業は先生が教科書を読み続けるのではありません。単語テストから始まる授業は、毎回50%以上がグループワークです。テストの後は、教科書のe-Book版でリスニング問題15分、次にグループで宿題の確認（単語などの知識宿題で10分、ユニットごとの会話技能の内容の宿題で15分）最後に楽しいクラスアクティビティで英会話を楽しみます。

教室全体に解説するときも、発音の練習を兼ねて学生が教科書の問題文などを音読し、ブライアン先生の指名に答える形で進みます。加えて、ブライアン先生のシラバスでは、授業外にオンライン学習90分が毎週指示されていますので、学生が多くの時間をアクティブに過ごすクラスです。

先生はこの授業の目標として、学生が中高で習ってきた6年以上の英語教育を強化することを挙げていらっしゃいました。英語会話のクラスなので、スピーキングとリスニングに自信をつけることも重要です。また、教科書の活動と毎週の小テストを通して、英語という言語に対する学生の理解を深めることが希望だそうです。

ALポイント 6.0

	項　目	内　容	授業外指示
第3週	Unit 5：Sociology - What does it mean to be part of the family?	Listening 1- Separated at birth.（Pages 90-98）	オンライン学習 90分程度 Listening 2 Preview
第4週	Unit 5: Sociology - What does it mean to be part of the family?	Listening 2 - Family history.（Pages 99-104）	オンライン学習 90分程度 Speaking Preview

授業の準備

先生が個人的に最も重要だと考えているのが授業準備です。90分間を最大限に活用できるように、授業計画を作成していらっしゃいます。学生が心地よく、英語を話すのを恐れない環境を提供し、グループワークでは自由に意見を言えるようにして、学生が英語能力を伸ばす機会を逃さないようにしているそうです。

心がけていること

Learning by experience（経験による学び）のために、アクティブラーニングの手法を活用しているブライアン先生。単語を暗記することも必要ですが、一方で実生活での会話に積極的に参加するためのアドリブの準備も欠かせません。学生には、とっさに創造的に考え、答えなければいけないアクティビティに挑ませていらっしゃいます。

先生は、学生がやってみなければ進歩は起きないという信条のもとで、自身も学んでいくという気持ちでアクティブラーニングを常に発展させていますが、振り返ってみると、レッスンの種やアクティビティの多くが自分が学生時代に経験してきたことから来ているともお話していました。学生の気持ちになって、という姿勢がさすがです。

授業の工夫と学生の反応

全体的に反応が良い学生たちですが、まだ精神的には子どもの面も少しあるため、90分の授業をしっかりと区切って様々なアクティビティを行うことで、集中力をキープしているのだそうです。授業中何度もセットされるカウントダウンタイマーは、特別な指示を出さなくても、音を目安に自分たちで気持ちを切り替え、今求められている行動を考えるためのツールとして役立っているそう。

どうしても午前中の大変なコマ設定にはなってしまいますが、山口大生は明るく元気で、教えがいのある子たちであると話すブライアン先生は、お互いにハッピーな授業になるよう工夫を続けておられ、これからも山口大生を教えていくことが楽しみだそうです。

評価の方法

教科書から出される宿題と、ユニットごとの口頭プレゼン、毎週渡される学術英単語のリストから出題される小テスト、そして評価全体の30%を占める最終試験によって、英語会話の能力が評価されています。特に3週ごとに行われる教科書のユニットのプレゼンには、学生が学んできたことについて、スキルと単語を含めて多くが含まれており、評価の割合も比較的高いです。また、時には、グループワークの成果によって加点がつくこともあるようです。

今後の展開

常に改善の余地はあると考えているブライアン先生は、15週間のシラバスを、そのまま使うのではなく、毎年より良いものにしていくべきだと考えていらっしゃいます。

クラスごとに異なる性格に対応しながら、授業計画や活動を、クラスのニーズに合わせて変化させることについて、今後はその場での柔軟な対応がより上手になりたい、とお話してくださいました。先生も常に学ぼうとする姿勢が、より良い授業を築いていることが良く分かりました。更なる活躍でまた楽しい授業が見られるのが楽しみです。

宿題を見ながらディスカッション

教科書を見ながらの解説も学生の回答が中心

楽しいアクティビティに、どんどん手が上がる

教材準備にも工夫が多い

インタビュイー
林 透 先生
Toru HAYASHI
大学教育機構 准教授

【授業担当者】
林　透　　准教授
山浦 晴男 非常勤講師
鈴木 春菜 准教授

文化の継承と創造1・2
サービスラーニング基礎（ミニ移動大学in仙崎）

この授業は、YFL育成プログラムのフィールドワーク型科目で、2泊3日の合宿を中心としたプログラムです。大学キャンパスから飛び出てフィールドを歩き、発見した課題をグループで沢山話し合うため、アクティブ・ラーニング100%の授業ともいえるでしょう。多くの協力で実現した素晴らしい科目の工夫を聞きました。

シラバスに基づく授業内容 「文化の継承と創造1・2」

【概要（共通教育の場合は平易な授業案内）】
この授業では、アクティブ・ラーニングの一つであるPBL型学習を基本に、KJ法の創始者である川喜田二郎先生が1969年以降に展開した『移動大学』の理念を継承し、「ミニ移動大学in仙崎」として実施するものである。具体的には、学生が長門市・仙崎地区の存在と価値を知り、当該地区が住民主体のまちづくりを進めていく方策について考える「合同合宿型フィールド演習科目」である。長門市・仙崎地区が誇る「詩人・金子みすゞ」などの文化資源や水産業などの経済資源」の魅力に触れ、地域資源の活用や情報発信について考えてみよう!

【一般目標】
この授業では、サービスラーニングで重視される市民性や社会貢献意欲を養うことを目的とする。また、やまぐち地域の大学生として、地域リーダー（Yamaguchi Frontier Leader（YFL））として自覚を培うとともに、他者への関わりや協働する力を養うことを目的とする。

【授業の到達目標】
［知識・理解の観点］地域資源の歴史や風土を理解し、その価値を説明することができる。
［思考・判断の観点］地域情報を探索し、かつ、地域住民への取材を行い、現状分析することができる。
［関心・意欲の観点］地域資源の歴史や地理に関心を抱き、地域住民との対話やメンバーとのグループ活動に積極的に取り組むことができる。
［態度の観点］地域リーダーとしての自覚を持ち、多様なメンバーとの対話やチームワークを通して、協働性を発揮することができる。
［技能・表現の観点］資料作成及びプレゼンテーションを適切に行うことができる。

【授業計画】
山口大学で事前学習
〈合宿1日目〉
導入講義・
まち歩き
〈合宿2日目〉
写真分析法による
ワークショップ・
イラストアイデア地図作成
〈合宿3日目〉
地域交流発表会・
プレゼンテーション

ALポイント 8.1

項　目	内　容
オリエンテーション 導入講義「地域再生概論」 まち歩き （長門市合宿1日目）	● 地域再生論の基礎理解 ● 長門市仙崎地区の概況説明 ● 地域住民の案内による「まち歩き」
フィールドワーク（街歩き） ワークショップ （長門市合宿2日目）	● 「問題意識地図」に基づき写真取材を行うフィールドワーク ● フィールドワークで集めた資料（写真）を活用して、「資源写真地図」を作成するワークショップ ● 「資源写真地図」を活用して、活性化案の立案を行い、イラストなどを用いてまとめるワークショップ
地域交流発表会 グループ・プレゼンテーション 振り返り （長門市合宿3日目）	● 関係者や参加者を交えた地域交流発表会 ● ワークショップで作成した「資源写真地図」と活性化案についてプレゼンテーション

授業の流れ

「文化の継承と創造（サービスラーニング基礎（ミニ移動大学in仙崎））」の授業は、2泊3日の集中講義で行われました。1日目は、午前の導入講義での仙崎地区の基礎知識理解を経て、午後のフィールドワークである「まち歩き」（A～Cの3コース）を行い、夜には、フィールドワークで感じたことをもとに、問題意識の発掘・共有化、取材した地区の「問題意識地図」を作成しました。

2日目午後は、1日目午後および2日目午前のフィールドワークで撮影した写真を分析しながら、グループごとに調査した仙崎地区の「資源写真地図」を作成しました。さらに、2日目の夜から3日目午前にかけて、「資源写真地図」に基づきながら、仙崎地区の本質的な問題の洞察から解決方向のコンセプトづくりとアイデアの発想・イラストアイデアカード化を行い、活性化案をもとに「イラストアイデア地図」（模造紙2枚規模）を作成しました。

最終日2017年9月24日午後からは、仙崎公民館を会場に、学生発表&地域住民交流会が行われました。地域住民・長門市役所関係者約30名が集まる中で、学生3グループは、仙崎地区の現状分析を行い、新たなまちづくり提案を展開し、なんと全体で50を超えるイラストアイデアを提案しました。

授業の準備

集中的にフィールドワークを行うこの授業では、合宿前の事前指導が欠かせません。2017年8月に事前講義として、授業概要の説明、フィールド演習の心構えに加え、能動的な学びを促すためにアクションシートの作成も行い、その経験を経た後に、2017年9月22日から24日の合宿に向かいました。

「ミニ移動大学」という手法については、前年度（2016年度）の周防大島町安下庄地区で試行プログラムを実施済であり、その試みから分かった改善点を踏まえて、今回の長門市仙崎地区をフィールドに選定しました。フィールドが決まってからも、事前調査及び打合せ、さらには、地域住民向け講演会を行うことで、下準備をしっかりと行いました。COC+事業によるこれまでの経験と、工学部　鈴木春菜　准教授と研究室学生の貢献により設置された山口大学初のサテライト拠点「仙崎まちなか未来研究所」の存在によって、綿密な準備ができました。

心がけていること

フィールドワーク型科目の準備はとにかく大変ですが、地域のニーズを把握しながら、学生のため、地域のためになる授業設計を心掛けることは、すごくやりがいのあることです。山浦先生の教えに学びながら、学生の学習活動やフレッシュな発案を糧にして、地域住民の主体性や自律性を引き出すことが最大のねらいです。

授業の工夫と学生の反応

この授業では、とにかくフィールドでの時間を長く確保していることはもちろん、方法論的にも工夫があり、講師の山浦先生が考案した、KJ法に準拠した写真分析法が活発な議論を促しています。

実際に学生さんからも「とにかくどの授業よりも充実していた」「実際に提案したアイデアに対し、仙崎の住民の方の反応を知ることができてよかった」との声が寄せられました。徹底的な地域密着の3日間で得られる経験は、非常にアクティブな学びがしっかりと計画されているから可能なのだということが分かりました。

評価の方法

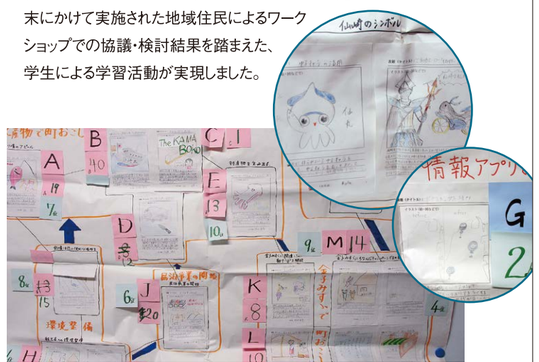
この授業では、活動日誌によるプロセス評価と最終プレゼンテーションによるアウトプット評価を行っています。プロセス評価とアウトプット評価のためのルーブリックを作成して、3人の担当教員が役割分担して学習評価に当たっています。

今後の展開

高等教育機関が存在しない長門市仙崎地区において、この授業のような取組は受講生だけでなく、地域住民にとっても新たな気づきを得る貴重な機会だったと思います。そのため、学生提案を踏まえて、今後は地域住民によるワークショップを企画し、住民同士での協議・検討する場づくりを進めていきたいと思います。地域住民主体の地域づくりを学生の授業で支援すること、その支援の過程で学生も住民も学びを通して共創を行うことが重要です。

実際に、次年度（2018年度）に開講したフィールドワーク型授業「サービスラーニング基礎（ミニ移動大学in仙崎）」では、2017年度末にかけて実施された地域住民によるワークショップでの協議・検討結果を踏まえた、学生による学習活動が実現しました。

「まち歩き」での発見をポストイットに書き出して発表



「イラストアイデアカード」とその地図には学生が実際に歩いて発見したアイデアが溢れている

ボランティアガイドによる「まち歩き」

学生発表を行った地域住民交流会は非常ににぎやかな様子

インタビュイー

佐藤 晃一 先生

Koichi SATO

共同獣医学部 教授

【授業担当者】
佐藤 晃一　教授
木村 透　教授
大濱 剛　准教授
柳田 哲矢 准教授
角川 博哉 准教授
日暮 泰男　助教
三宅 在子　助教
渡邊 健太　助教

生物学実験

2017年度までの共同獣医学部の生物学実験では、班ごとに若手教員の研究室に通い、自分たちで立案した実験を進めてプレゼンにまとめます。長年にわたりこの授業に携われてきた佐藤先生は、受賞を喜んでおられましたが、実は学生の満足度の高さについては既に自覚があったそうです。今回は2018年度以降の変化についても教えていただきました。

シラバスに基づく授業内容 「生物学実験」

【概要（共通教育の場合は平易な授業案内）**】**

生物学的知識の実践的習得と生物学研究の基本となるべき実験方法を会得することを目的に、実際に観察、記録を行い実験結果の解析と考察を行う。全体での一般的な生物実験の基礎を学んだのちは、グループに分かれ、実際に問題提起、実験計画立案、実験の実施、結果の解析、考察、成果発表を実施する。

【一般目標】

生物、特に動物を扱う実験方法の基礎を実践的に習得する。

【授業の到達目標】

［知識・理解の観点］生物学で学んだ知識を実践的に活用できる。
［思考・判断の観点］生物を扱う実験であることを理解し、的確な扱いが行える。
［関心・意欲の観点］生物理解への関心をもち、その解明に必要な実験方法を提案できる。
［態度の観点］　生物実験においては生命の犠牲が伴うことについて真摯に受けとめ、謙虚な態度で実験観察に臨める。
［技能・表現の観点］自らが計画し、実行した実験結果について、他の人々が理解できるように適切に伝達できる。

【授業計画】

〈第1週〉
ガイダンス、班分け等

〈第2週〉
班別実験テーマ提案

〈第3週〉
動物取り扱い実習

〈第4〜12週〉
教科書ワークを3週で1ユニット

〈第15週〉
プレゼン発表会

授業の流れ

後期に開講されているこの授業では、入学するまで動物に触ったことがなかった、という学生も含む1年生に対して、生物に触れ、実験する方法の基礎を教えています。

獣医師は科学者でなければならないとの観点から、実験の立案・実施・観察・記録の全てを主体的に行い、最終的に実験結果の解析と考察を行った後、プレゼンなどで他の人が理解できるように適切に伝達することを課題としているそうです。

2週目に班で担当教員に立案した実験テーマに基づき、案4週目から12週目は班ごとに研究室に通って自分たちの実験を進めます。そのため毎回50%以上がグループワークです。最終週のプレゼンに向けて、実験の基本から考察、プレゼンスキルまで6人の班に対して1人の先生が授業コマの時間外にも熱心に対応してくれているそうです。

「食料としての蚕」グループの実験風景
動物福祉の観点から実験が難しくなっているため、微生物などの動物を使わない実験に転換しましたが、2017年度は指導の下でマウスを使った班もありました。

	項　目	内　容	A※	B	C	D
第1週	ガイダンス・実験動物取り扱い講習：班分け	本実験の内容説明と実験動物の取り扱い方について説明します。	【多】※	【少】	【少】	—
第2週	各論指導教員への実験テーマの提案		【多】	【多】	【少】	【中】
第3週	マウス等の動物の取り扱い実習	「動物取り扱い教育実習」受講。	【多】	【少】	【中】	—

ALポイント 9.0

※A：グループワーク、B：ディスカッション・ディベート、C：フィールドワーク（実験・実習、演習を含む）、D：プレゼンテーション】
※【多】：授業時間の50%超、【中】：授業時間の15%〜50%、【多】：授業時間の15%未満

実施体制

1年生を5〜6班に分けて、実験を進める間は6人程度の班ごとに先生が1人つきます。この班ごとにつく教員については、できるだけ若手が担当することで、学生と教員間のディスカッションの垣根を低くしているそうです。

学生が自分たちでやりたいことを自分たちでやらせることを基本原則としているため、教員はその実験が実施可能か、動物福祉などに配慮されているかなど助言を与えるのみです。方向性をキープするという指導方法については、この授業の始まる前と終わりに若手とベテランで集まり、注意する点の確認とリフレクションが毎年度行われています。

授業の工夫と学生の反応

お仕着せではなく、全てを自分たちで考えさせ実施させることで、この授業は非常に効果的なアクティブ・ラーニングを実現していました。共同獣医学部の学生は元来、動物から微生物までの生物について幅広い関心を持っており、興味を引き立たせるテーマを与えれば、自分たちで考える深い学びが実現できるとお話してくれました。

中にはシャイな学生もいますが、グループを作ることで適材適所が成り立ち、よい実験体制が作られているそうです。全員が研究室に通うことになるため、2・3年次に多く行われる研究室訪問としての側面もあり、先々のキャリアを見越した経験が培われています。

評価の方法

実験科目の成績評価はとても難しいのですが、この生物学実験の授業では、各学生の実験への取組状況、発表時の態度、考察の深さ、質疑応答などを元に評価がされています。点数はプロセスについての評価が75%、結果についてが25%という割合です。

特に実験プロセスについては、受入教員の研究室で実験を行うことからも、各研究室の先生による担当する6人の学生の取組状況をよく理解した上での丁寧な評価が行われています。

一方で結果については、最終発表に参加する4人のベテラン教員による4項目100点満点の採点を受ける仕組みです。学会の奨励賞などを参考に、発表時の態度などを客観的に評価できる体制を取っているとのことでした。

「おがくずの抗菌効果」のグループの実験風景

最終発表会で各班がプレゼンをする

今後の展開

共同獣医学部の生物学実験については、2018年度に大きく変更されました。欧州獣医学教育評価機関（EAEVE）の認証を受けるにあたり、動物に多く触れるために、ヤギと障がいのある牛の飼育を通じて疑問と改善を考えるアクティブラーニングの授業になりました。

他にもEAEVEの認証のために学生が評議員に加わるなど、学生による教育評価の仕組みが作られました。集まった声をきっかけに設置された「クリニカルスキルラボ」では、飲食可能な自習室で学生が録画授業を見たり、クラウドファンディングで設置したモデルを扱ってみたりと授業外でも活発に学ぶことができるようになりました。今後もこうした教育課以前の取組が続くそうですので、期待が膨らみました。

「クリニカルスキルラボ」では、飲食可能な自習スペース（上）、教科書（左下）、そして大型・小型動物のモデル（右下）を自由に使うことができる。

05

インタビュイー

中溝 朋子 先生

Tomoko NAKAMIZO

大学教育機構 教授

日本語ⅣA（文法）

反転学習やクリッカーを使った文法の授業でベストティーチャー賞を受賞なさった中溝先生。
こうした手法は先生の「文法授業を良くしたい!」という思いから取り入れ始めたそうです。
次々と新しい方法やアクティブラーニング教室を活用する授業の秘密についてインタビューしてきました。

シラバスに基づく授業内容 「日本語ⅣA（文法）」

【概要（共通教育の場合は平易な授業案内）**】**
中上級レベル（日本語能力試験N2〜N1レベル）の表現・文型、副詞のいくつかの項目を学び、適切に使えるように練習します。副詞は、似ている意味を持つ副詞を1回3〜4語選び、その違いや使い方を勉強します。

【一般目標】
授業で取り上げた文法項目について理解し、場面や文脈に応じて適切に使用できることを目標とします。

【授業の到達目標】
［知識・理解の観点］学習した表現・文型の意味・使用法を理解する。
［思考・判断の観点］学習した表現・文型を使って、適切な文を作ることができる。
［関心・意欲の観点］学習した表現・文型を積極的に使用する。小グループのメンバーの理解を助けようとする姿勢と意欲を持つ。
［態度の観点］小グループで協力し合い、お互いに学習項目への理解が深まるよう積極的い活動に参加する。
文法項目の分析や互いの回答を見直し、自ら訂正しようとする態度を身につける。
［技能・表現の観点］学習した表現・文型を場面や表現意図に合わせて使用できる。

【授業計画】
〈第1週〉
授業内容オリエンテーション、
副詞と文法の講義・練習問題
〈第2週〉
Moodleオリエンテーション、
副詞と文法の講義・練習問題
〈第3〜7、9〜15週〉
文法の反転授業、
副詞の講義・練習問題
〈第8、16週〉
試験

授業の流れ

講義中心になりがちな文法の授業を反転学習にしています。そのため、学生はまず授業前にオンラインで解説ビデオの視聴と対応した宿題の回答を済ませており、授業ではグループワークと演習が中心です。

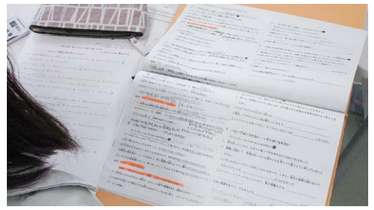
1週目と2週目のオリエンテーションで、授業の形式と自宅学習の方法を教えた後は、毎回最初の15分程度の副詞の一斉授業を除き、ずっと「反転授業」が続きます。各自、ビデオの表現・文型についてのプリントを解き、グループで回答一致を目指してディスカッションを行います。グループで解決できないときは先生に質問できます。全グループのディスカッションが終わったら、先生がPowerPointで正解を見せ、改めて質問を受けたり、ディスカッションの最中に質問が多かったところを解説したりします。ディスカッションが終わったグループから、文の完成問題のプリントを各自で行い、終了次第、グループで読み合い、チェックをします。終了10分前には理解度チェック問題を行い、最後にコメントシートを書いて授業が終わります。

到達目標は、中上級レベルの文法クラスのため、日本語能力試験N2、およびN1の表現・文型を理解し、運用できる能力を身に付けることです。中溝先生の希望では、さらに、文法という点から自分の日本語をモニターし、改善できるような姿勢や知識を身につけてもらうこともねらいなのだそう。中溝先生が育てたい、理想の学習者像が伺えます。

ALポイント 9.0

	項 目	内 容	授業外指示
第1週	オリエンテーション	授業内容オリエンテーション 副詞：講義と練習問題 文法：簡単な文法用語解説と練習問題	
第2週	Moodle オリエンテーション 副詞②：限定①	Moodleの登録と使い方の説明 副詞：講義と練習問題 文法：説明ビデオ視聴・ Moodle練習問題の方法確認等	次回授業の 文法説明 ビデオ視聴と 宿題

グループ毎に宿題を見ながらディスカッション



教科書には学生の書き込みが沢山

授業の準備

中溝先生は、2015年から文法授業の改善の一環で反転授業を行っていらっしゃいました。学生達が宿題で見てくる文法ビデオは、その頃から作り始めたもの。PowerPointのスライドショーの機能を使い、始めは週末をフルに使って録音していたそうです。学生の集中力を考慮して、5〜10分程度の動画を複数作成し、Moodleで小テスト機能を使った宿題と共に、毎週公開しています。

授業内で使用するプリントについても、ビデオで学んだ表現が繰り返し出てくるものを用意し、定着を図っています。はじめは選択問題が多く、少しずつ難しい問題に触れられるように工夫しています。

心がけていること

深い学びを促すために、「わかった（つもり）」→「わからない」→「わかった（つもり）」を何度も繰り返させる状況を準備していらっしゃるのが、中溝先生の最大の工夫でした。練習問題が易しいものから難しいものへ進むのも、この繰り返しの工夫のひとつです。

加えて中溝先生が心がけていらっしゃるのは、授業ごとに何がわかって、何がどうわからなかったかを具体的にはっきりさせたいということです。そのため最後に「理解度チェック問題」をしたり、コメントシートに各項目の理解度を評価させたりなどを行っていらっしゃいます。

授業の工夫と学生の反応

反転授業の中でも「完全習得学習型」を目指している中溝先生。一斉授業ではついていけなくても、自分で何度でも見直せる文法ビデオでの自宅学習と、質問しやすい演習型の授業によって、全員が一定のレベルを達成できるように授業を設計なさっていました。グループワークが多いので、自分で説明する・教えることによる伸びも期待していらっしゃいます。

学生が面白がっているのは、クリッカーを活用した理解度チェックです。リアルタイムで各学生の回答を表示できるツールを最後に使うことで、正解率100%で拍手が起きる回もあるそうです。中溝先生は、YU-AP推進室でのデモ後すぐこのクリッカーを活用し始めてくださいました。学内でもトップクラスに使って頂いています。

文法という授業内容のため、日本語専攻かどうか、大学院進学や日本企業就職を目指すかどうかなどで文法的な知識やモチベーションの差もありますが、まじめに課題に取り組む学生が多いそうです。

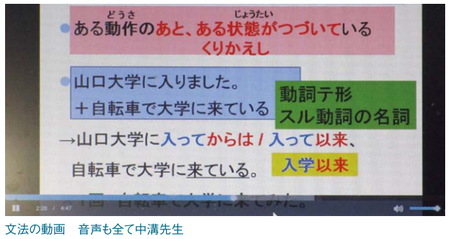
評価の方法

評価については、授業の目標である日本語の習得レベルに対応して、試験75%、宿題の25%で得点がつけられます。

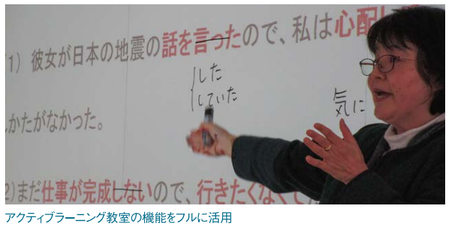
授業参加度も5%加味されますが、あくまで文法の授業としての到達目標に対しての評価です。

今後の展開

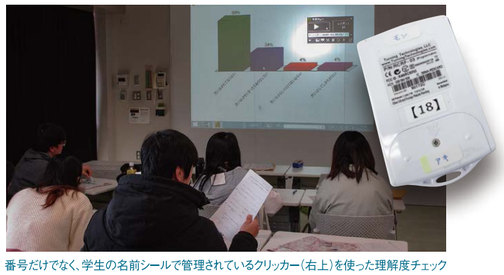
反転授業・クリッカーの活用を含めて、文法の授業の進め方としては、15年度からの実践を通してほぼ定着したそうですが、今後の課題はまだ受身の部分が見られる学生についてです。学生のディスカッションの様子を録画して研究もなさっており、これからも熱心に学生の意識や学習姿勢の改善を目指した取り組みを行っていきたいそうです。



文法の動画　音声も全て中溝先生



アクティブラーニング教室の機能をフルに活用



番号だけでなく、学生の名前シールで管理されているクリッカー（右上）を使った理解度チェック

YU-AP学生スタッフは、山口大学の学びの好循環に学生として貢献するべく、
学生FDサミット参加など積極的な活動を行っています。
そんな彼ら自身がアクティブ・ラーニングや大学での学びをどう考えているか、
2019年2月14日（木）に意見交換をした記録をもとに、
今回のLearning Catalogを綴ります。

学習者の視点から大学の学びを考える

第1回 YU-AP学生スタッフ座談会

【参加者】経済学部 2年 杉本さん／経済学部 4年 Aさん／ 理学部 2年 Bさん／農学部 2年 Cさん

【高校と大学の違い】

高校と大学の違いは何ですか?と尋ねると、「**自由度が増す**。大学は良くも悪くも自由である。時間がありすぎてダラダラしてしまうこともちろんあるが、反面、時間があることで**自分のやりたいこと**に没入できる。」と、インタビュイーの山口大学生三人は口をそろえて言います。

【大学に入学してよかったと思える点】

大学に入学してよかったと思えることはありますか?という質問に対して、経済学部でありながら法学も専門的に学べるコースに所属している4年生のAさんは、「経済学部に進学したが、私は法学にも関心があるんです。**経済学部であっても法学について学ぶことができる**点が山口大学のいいところだと思います。」と、にこやかに言ってくれました。

自由にやりたいことに没頭できる大学生活

【留学・インターンシップ】

4年生のAさんのゼミは研究でイギリスに行っている間も通信で指導してくれるほど**熱心な先生**だったので、**「質の高い論文」**を目指して、テーマの景品表示法に関係する機関を訪問したり、自分でインターンシップにも行ったそうです。

留学やインターンについてAさんは、「そうした活動がどうこうではなく、そうした**活動を通して何を学べて、何に活かせるかということが最も大事**だと思います。だから、留学なら留学でしてもいいし、しなくてもいいと思います。一番よくないことは、何かやったのにそこで何も学ばないってことだと思います。」と、言いました。

【印象的な講義や演習について】

印象的な講義や演習は何かありますか？という質問に対して、「入学してから半年間ある**基礎セミナー**というものがあり、農学部ではそこで、あらゆる分野の先生方がご自身の専門分野を紹介してくださるんです。この基礎セミナーのおかげで、入学したばかりの1年生は**自分の関心のある分野をある程度絞る**ことができるんです。こうしたセミナーはとてもありがたかったので、とても印象に残ってます。」と、農学部2年のCさんは言いました。このセミナーのことを聞いて、私はうらやましく思いました。

理系学部の実験科目のレポート課題の大変さが話題となり、授業外学習を沢山しているんだなと感心しました。

【アクティブ・ラーニングについて】

よく耳にするアクティブ・ラーニング。このアクティブ・ラーニングの印象について、理学部2年のBさんは、「1年生のころはよく講義内でも聞いていたし、グループディスカッションなどもよく行われていたが、**専門科目になってからは、あまり行われなくなった**印象があります。アクティブ・ラーニングは、いい学習法のひとつだと思う。**ほかの人と考えることで、ひとりで考えるよりも頭に残りやすい**。」と言いました。

授業内の学生同士の対話でより深く学べる

最後にどんな大人になりたいですかと尋ねると、三人に共通のキーワードは「責任ある大人」でした。来年度から社会人になるAさん、これからより学問に専念するBさん、Cさんの活躍に期待したいです。
（インタビュアー 経済学部 2年 杉本寛晟）

第2回 YU-AP学生スタッフ座談会

【参加者】理学部 2年 大亀さん／人文学部 3年 Dさん／経済学部 3年 Eさん／工学部 2年 Fさん／農学部 2年 Gさん／理学部 1年 Hさん

【大学に入学してよかったと思える点】

大学に入ってよかったと思えるところは、まずDさんやEさんから好きな学問の分野が学べることがあげられました。大学の講義の中で高校の時よりも**専門的なことが学べる**ことが良いと感じているという意見があげられました。そのほかにも**一人暮らし**をすることで親のしていたお金の管理などをすることで社会の仕組みを知ることができたという意見もありました。学生は学習や私生活のなかで大学に入ってよかったと感じているようです。

専門の学びと様々な体験で、自分の強みを伸ばしたい

【印象的な講義や演習について】

大学の授業で印象に残っている授業として多かった授業は話し合いなど能動的な学習を主な内容としている授業でした。特にDさんの受講した**山口と世界**では他学部との話し合いなど普段あまりかかわらない学部の学生と交流するため印象に残っているようです。

その一方で、共通教育における合唱を扱った教養系の授業が印象に残っているとの声も聞かれました。

【アクティブ・ラーニングについて】

アクティブラーニングについて学生の意見として取り入れるべきという意見が多かったです。Fさんからはアクティブラーニングの方が**積極的に行動**するため座学の講義よりも他の学生の意見や考え方を知ることできるなどメリットがあるため取り入れた方が良いという意見があがりました。他の学生と話し合うことで**先生から言われるよりも力が身につく**と感じるようです。しかし、他学部の学生と少し話しにくいと感じる場合などのデメリットもあげてくれました。

【留学・フィールド学修】

留学に対する意見として留学できるのであればしたいという意見があがりました。しかし、ある程度の語学力が必要なことやお金の問題から留学は難しいという意見があがりました。また、留学をするのであれば短期留学よりも**長期留学の方が考え方が変わってよい**かもしれないという意見もあがりました。

Eさんなどの受講した**地域でのフィールド学習（YFL科目）**は他学部や他の年齢層の人と交流できるため良いという意見があがりました。留学やフィールド学習について肯定的な意見がありましたが、留学はさまざまな理由から難しいと感じているようです。

【入学時の自分と比較して成長したと思う点】

入学時と比較して成長した点として落ち着いて様々なことができるようになったことがあげられました。そのため自分に向いている事や**得手、不得手が分かってきた**という意見があげられました。

Hさんは今までよりも自分のことを知ることができると感じるようになったと感じると答えてくれました。大学に入学して**精神的に成長**したと感じる学生が多いようです。

【もっと学びたい分野、身につけたいこと】

大学でもっと学びたい分野としてそれぞれの興味のある学問の分野が多くあげられました。また、Gさんは学びたい分野が決まっていないため今学習している分野をもっと学びたいという意見を述べており、皆がそれを褒めていました。

そして、身につけたいこととして、Hさんのようにそれぞれの**長所、短所をより伸ばしたい**と思っている学生が多くいました。そのなかで**いろいろなことにチャレンジ**することで新しい一面を見つけたいと思っている学生もいました。

大学の授業の中で大学卒業後のために職業の話もしてほしいという意見も。大学の講義で学んでいることはどのような職業につながっているか知りたいと思っているようです。

今回インタビュアーをしてみて他学部の学生の意見を聞けて異なった考え方に触れることができてよかったと思います。
（インタビュアー 理学部 2年 大亀洋輔）